ラトナーカラシャーンティのプラマーナ論

護　山　真　也

0．はじめに

10 世紀後半から 11 世紀前半にかけて，ヴィクラマシーラ大僧院で活躍したラトナーカラシャーンティ（Ratnākaraśānti）は，顕密の両教義（pāramitānaya と mantranaya）に通暁し，同僧院の六賢門の一人に数え上げられる．ラトナーカラの顕教関連の思想解明を目指した従来の諸研究は，彼と同時代に活躍したジュニャーナシュリーミトラ（Jñānaśrīmitra）・ラトナキールティ（Ratnakīrti）師弟の見解と鋭く対立する，形象虚偽論（alīkākāravāda）や内遍充論（anatarvyāpti）を主なトピックとして扱い，貴重な成果を積み重ねてきた．

形象論にせよ，内遍充論／外遍充論の対立にせよ，これらのトピックは，ラトナーカラがディグナーガ（Dignāga）・ダルマキールティ（Dharmakīrti）により創始・展開されたプラマーナ論（正しい認識の根拠に関する議論）を受容した結果として生まれてきたものである．しかしながら，ラトナーカラが一体，どのようなプラマーナ論の体系を念頭におきながら，形象論や論理学的議論を発展させたのか，という点はこれまで等閑視されてきた．

本研究の目的は，彼の『中観荘厳註・中道成就』（**Madhyamakālaṅkāravṛtti Madhyamapratipatsiddhi* = MAV, P. 5573/D. 4072）の vv. 32–40 とその註解に見出されるプラマーナ論の体系を明らかにすることにある．その体系においては，(1) 勝義のプラマーナとしての仏・菩薩の真実知，(2) 世俗のプラマーナのうち，非概念知である自己認識，(3) 世俗のプラマーナのうち，概念知である推理という三種類の認識が分類されている[1)]．以下では，それぞれに対するラトナーカラの説明を検討しながら，その思想史的な意義を確認する．

1．勝義のプラマーナとしての仏・菩薩の真実知

ラトナーカラは，まず仏・菩薩の真実知を次のように紹介する．

［D 111a1–2; P 127b1–2］
ye shes chos rnams thams cad la // kun tu 'khrul ba mi mnga' ba //
yang dag mtha' bsgoms las byung ba // dam pa'i don la mngon sum yin //32//
（仏・菩薩の）叡智は一切諸法に関して，錯誤を全くもたないものであり，真実の究極（＝空性）を瞑想することで生まれた，究極的対象に対する知覚である．
［D 111a4; P 127b5］
gzhan gyi dbang gi shes pa yis // phung po la sogs kun brtags pa //
yang dag shes la snang ma yin // snang ba yongs su grub pa yin //33//
依他起の認識（＝間違った構想作用）によって「蘊など」として想像されたものは，真実知には顕現しない．（真実知に）顕現するものは，完成したものである．

この二つの詩節では，唯識思想の三性説を背景にしながら，仏・菩薩の真実知とは，依他起性から遍計所執性がなくなった状態，すなわち，円成実性の状態にあることが述べられる．ブッダが説いた五蘊・十二処・十八界などのカテゴリーは，依他起性の本体である，間違った構想作用（abhūtaparikalpa）により想像された虚偽なるものであり，これらは仏・菩薩の真実知には顕現しない．真実知に顕現するものは，あくまでも真実対象である空性に他ならず，その空性が，「真実の究極」「究極的対象」と表現されている．

ラトナーカラは，この真実知を知覚の一種として位置づけるものの，この両詩節ならびにその注釈箇所において，これを「勝義のプラマーナ」と明示するわけではない．しかしながら，続く vv. 34–40 を導入するにあたり，「世俗のプラマーナを主題として七つの詩節を教示する」（'jig rten pa'i tshad ma'i dbang du byas nas / tshigs su bcad pa bdun ston te）と言う表現をしていることから，それとの対比で，この両詩節を「勝義のプラマーナ」を述べたものと解されよう．そして，この勝義のプラマーナを定義する要素としては，「錯誤のないこと」が挙げられる．この語を注釈して，彼は「（錯誤がないのは，）真実ならざるもの（＝蘊など）を真実として知るわけではなく，また，言語表現（mngon par brjod pa, *abhilāpa）が無いからである」と述べており，「欺きのないこと」（avisaṃvāda）というプラマーナの定義を満たし，かつ，非概念的であるという点で知覚の定義も満たすものと考えているようである．

2．世俗のプラマーナ①：自己認識

では，円成実性が成立していない，日常的な認識のレベルにおけるプラマーナはどのように考えられるのだろうか．ラトナーカラは，日常的な認識のレベルで

もプラマーナと呼ばれるものとして自己認識と推理の二つを挙げる．このうち，自己認識に関しては，次の三つの詩節で解説がなされる．

［D 111b5–6；P 128a8］
dkar po la sogs snang bas bsgrub // mi snang de nyid bkag pa yin //
shes pa de nyid rang rig ste // gzhan du thug pa med par ’gyur //34//
白などは（心の）顕現として成立する[2]．（現に経験されている）それ（＝顕現）が，「（白などは）非顕現である」ということを否定する．それ（＝顕現）は，認識であり（＝心の輝きと同一であり），自己認識である[3]．そうでなければ，無限後退になるからである．
［D 112a2–3；P 128b5–6］
tshad ma de yang slu（D：bslu P）med phyir // mi slu（D：bslu P）ba ni ’brel ba’i phyir //
rtogs pa’i dngos des nus par yod // de yi bdag nyid mtshan nyid do //35//
そして，その（認識）は，（対象に対する）欺きがないから，プラマーナである．欺きがないことは，（認識と対象との）結合関係に基づく．（その認識は，）覚知というその本性を伴い，能力としても存在する[4]．（だから，認識と対象との）同一性（*tādātmya）を特徴としてもつ．》
［D 112a5–6；P 129a1–3］
nus dang shes pa’i bdag nyid pas // de’i phyir mngon sum tshad ma yin //
phyi rol mngon sum min gzhan phyir // ’gugs pa min phyir ’khrul ma yin //36//
したがって，能力と認識を本体とすることにより，（自己認識は）知覚というプラマーナである．外的な（白など）は知覚（そのもの）ではない．（物的なものと心的なものとは）別個のものであるから．（外的なものは）歪められるものではないから，（それを）錯誤するわけではない．

三性説を前提にした場合，白などの諸対象は，間違った構想作用により想像されたものであり，虚偽なるものである．しかしながら，その白などは，輝き（prakāśa）を本性とする，依他起の認識と結びついた顕現（pratibhāsa）である限り，依他起の認識と同一のものであるとも言える．その同一性の観点から，白などの顕現は自己認識として捉えられる．

この第 34 詩節が述べる内容は，ダルマキールティが PV III 8–9ab において，ティミラ眼病者に映じる非実在の髪の毛などは，一面においては，認識を在り方として，自己認識されるものであると論じたことを想起させる．また，その顕現が，それに後続する別の認識によって認識されるのだとすれば，それを捉える，さらに別の認識が想定されることになり，無限後退（anavasthā）の過失に陥ると論じらている点は，PV III 440ab と等しい．

一方，次の第 35 詩節では，ダルマキールティがプラマーナを定義する際に用いた「欺きのないこと」（avisaṃvāda）という術語が導入される．ダルマキールティ

が言う「欺きのないこと」は，認識とその認識に基づく行為の目的との間にある，因果的な結合関係を前提として成り立つ．これに対して，ラトナーカラは，「目的実現」(arthakriyā) という術語を用いず，「欺きのないこと」とは，同一性 (tādātmya) あるいは因果性（tadutpatti）のいずれかの結合関係であると定義する．このうち，自己認識が「欺きがないこと」は，白などの顕現と認識の本性である輝きとの間には，同一性の関係があるという理由から正当化される[5]．これが，ラトナーカラが世俗のプラマーナとして認める非概念的な知覚である．

3．世俗のプラマーナ②：推理

次に，概念知を検討するために，次の四つの詩節が述べられる．

［D 112b2–3, 5–6；P 129a7, b2–3］
rnam rtog kha cig don gzhan la // gang phyir zhen pas（D：pas *om*. P）slu（D：bslu P）ba med //
de nyid med phyir brdzun pa ni // ji ltar snang bzhin rnam par gzhag //37//
特定の概念知は，（顕現とは）別の対象に対する実体視によって，（その対象に対して）欺きがない．（概念知の対象である普遍相は）真実性がないから虚偽であるが，（普遍相が）顕現している通りに（実体視される対象は）定められる．
［D 112b7, 113a7；P 129b4, 130a5–6］
ji bzhin yang dag dran pa dang // ji ltar mngon sum rjes skyes ni //
khyad par rjes ’gro med pa dang // spyi ni grub bsgrub pa yin //38//
例えば，正しい想起や知覚の後に生じるもの（＝概念知）のようなものである．（だが，それらは，すでに把握されたものを再度把握するものであるから，プラマーナではない）．
【問】（推理対象である）特定のものは（実例に）随伴せず，普遍は，周知のことが論証されただけのものである．
［D 113b1；P 130a7］
gang phyir khyad par ’dzin pa’i phyir // rjes su dpag pa tshad ma yin //
chos can ma ’brel rnam gcod pas // spyi yang ’dzin par byed pa yin //39//
【答】（未だ知られていない）特定のものを把握するから推理はプラマーナである．主題との非結合の排除（*ayogavyavaccheda）によって，（推理は）普遍も把握する．
［D 113b5–6；P 130b4–5］
de brgyud de las byung ba ni // rjes dpag blo yi ’brel ba yin //
rjes su dpag par bya ba ni // rtags las shes te rjes dpag yin //40//
その一連の流れである，それから生じること（＝因果性）が[6]，推理知と（対象との）結合関係である．推理される対象は論証因に基づいて知られる．（これが）推理である．

概念知は，対象そのものではなく，その概念を対象とする認識であり，X を Y と見間違う錯誤知の一種である．ラトナーカラは，錯誤知である概念知の本質を実体視（adhyavasāya）として捉えた上で，実体視される対象と実体視（概念知）と

の間には，「欺きのない」関係が成立すると考える．

周知のように，ディグナーガ以来の仏教認識論では，知覚の対象は独自相（svalakṣaṇa），推理の対象は普遍相（sāmānyalakṣaṇa）として考えられてきた．さらに，ダルマキールティは究極的な実在は独自相のみであるとして，推理もまた究極的な実在に間接的に関わると主張した．彼の見解では，推理は本質的に錯誤知であるが，意図された対象を欺かないという点で，プラマーナに分類される[7]．

ラトナーカラのスタンスもこれに通じるところがある．ただし，彼の場合には，推理のみならず，想起や知覚の後に生じる概念知も，「実体視によって，対象を欺かない」ものと考えられている点に違いがある．概念知の対象は，「他者の排除」（anyāpoha）と呼ばれる言葉の意味・対象に他ならない．例えば，牛の概念知は，「非牛の排除」という普遍相を捉える．この場合，「他者の排除」たる普遍相は実在しない虚偽のものであるが，それは，概念知に顕現している通りに定められているという点で正しい．

だが，概念知における欺きのなさをこのように理解するならば，正しい想起や知覚の後に生じる概念知などもプラマーナであることになってしまう．この過失を回避するために，ラトナーカラは，ダルマキールティがプラマーナの第二定義として与えた「未知対象を照らし出すもの」（ajñātārthaprakāśa）という規定を考慮に入れて，それらの認識は「すでに把握されたものを把握するから」（gzung ba ’dzin pa’i phyir, *gṛhītagrahaṇatvāt）プラマーナではないと主張する[8]．

さらに彼は，この議論に付随して，知覚に「概念を介在しない知覚」（nirvikalpapratyakṣa）と「概念的な知覚」（savikalpapratyakṣa）の二段階があることを認め，後者によって牛の類（jāti）などの特殊が知られると説く他学派（おそらくはミーマーンサー学派のクマーリラ[9]）の見解を検討する．彼らの見解では，概念的な知覚が生じる段階ではじめて，牛などの類が新規情報として把握されると考えているが，これに対してラトナーカラは，「あらゆるものは，同類・異類から排除された実在の本性をもつ」（thams cad rigs mthun pa dang mi mthun pa las ldog pa’i dngos po’i ngo bo yin）と述べ，その本性が第一段階の知覚で把握されている以上，第二段階の知覚は新規情報を与えるものではないと論じる[10]．同様に，知覚の後に生じる「牛」という確定知もまた，そのような実在の本性を捉えない．したがって，それは知覚というプラマーナではなく，また，論証因に基づく認識ではないので，推理でもない．

それならば，概念知の一種である推理がプラマーナとされるのはなぜなのか．

これもまた，新規情報を与えるものではなく，あくまでも「他者の排除」という普遍相のみを知らせるのみではないのか．煙が立ち上ることから，向こうの山にある火が推理されるとしても，その「火」は普遍相であり，先に見た概念知の対象と同じく，すでに把握されたものにすぎないのではないか．

第 39 詩節後半が提示する，このような反論に対して，ラトナーカラは，ダルマキールティが主題諸属性（pakṣadharmatva）の分析で用いた「非結合の排除」（ayogavyavaccheda）という概念を導入しながら[11]，主題との非結合の排除によって，主題以外のものとも結びつきうる普遍相が推理によって把握されてはいるものの，同時に，非結合の排除を特質とするその普遍相により，主題に限定された特定のもの（viśeṣa）―おそらくは先の「同類・異類から排除された実在の本性」と部分的に重なるもの―も把握されるのだと述べる[12]．

最後に，この推理対象である特定のものと推理知との間には，因果性の関係があることが論じられる．この結合関係があるからこそ，推理知はその対象を欺くことがなく，また，主題に限定された特定のものという未知対象を知らせることができる．したがって，推理はプラマーナであることが結論づけられる．

ここでのラトナーカラの推理論は簡素なものであるが，推理対象を主題に限定された特定のものであるとして，主題や実例とは切り離れた普遍相とを別立てしようとする考え方は，彼が刹那滅論証で展開した内遍充論―遍充関係は純然たる普遍相互の間で成り立つものであり，具体的な実例の上で確認されるものではない―とのつながりを予想させる．しかしながら，その詳細な検討は，別に行われなければならない．

4．結論

以上から，ラトナーカラのプラマーナ論には，(1) 三性説を前提としながら勝義・世俗のプラマーナの分類がなされていること，(2)「欺きのないこと」を同一性・因果性いずれかの結合関係として定義し，自己認識と推理のそれぞれに振り分けていること，(3)「未知対象を照らし出すもの」という定義を基準として，推理知を他の概念知と峻別していること，という三点の際立った特徴が理解されるであろう．

〈ラトナーカラシャーンティによるプラマーナの体系〉

勝義のプラマーナ (pāramārthikapramāṇa)	仏・菩薩の真実知 ＝瞑想から生まれる空性の直観知
世俗のプラマーナ (sāṃvyavahārikapramāṇa)	(1) 自己認識（非概念知） ＝対象（顕現）との同一性の関係により欺きのないもの (2) 推理（概念知） ＝推理対象である特定のものとの間の因果関係により欺きのないものであり，新規情報を提供するもの
プラマーナならざるもの (apramāṇa)	(1) 外界の対象に対する認識 ＝認識と同一性の関係をもたないもの (2) 想起・知覚後の概念知 ＝実体視の対象に対して欺きのないものであるが，すでに把握したものを把握するもの

1）ダルマキールティによる勝義・世俗のプラマーナの分類については，PVin I　43.14–44.6；若原［1988］，稲見［1989］を参照．

2）Cf. MAV D 111b6, P 128a8–b1：dkar po dang / ser po dang / dmar po la sogs pa snang bar grub ste / dkar po dang ser po la sogs pa snang ba nyid ni［/］nges pa'i phyir ro // なお，MAV ad MA 32–40 の和訳研究は，『奥田聖應先生斯学 50 年記念論集』に掲載予定である．

3）Cf. MAV D 111b7–112a1, P 128b2–4：snang ba de nyid shes pa yin te / 'di ltar snang ba ni gsal ba'o //［...］de'i phyir shes pa nyid（P：nyid du D）snang ba yin te // de nyid kyang rang rig pa yang yin te /

4）Cf. MAV D 112a4f, P 128b8：de la **des** zhes bya ba ni shes pa'i rang gi（D：rang gi rang gi P）ngo bo rtogs pa dang / nus pa yang yod na, de'i bdag nyid kyi 'brel pa'i mtshan nyid yod do // ここで言われる「能力」（nus pa, *śakti）については，PV III 392–393 を引用しながら，外的なもの（例えば種子）に能力はなく，ただ認識のみが能力をもつことが論じられた MAV D 103b7–108a1, P 119a8 の議論を参照のこと．

5）ただし，形象虚偽論の立場からは，この同一性とは「虚偽の同一性」とも呼ばれるものであり，形象真実論のように，形象と認識とが完全に同一であることを述べているわけではない．ラトナーカラの形象虚偽論については，“Ratnākaraśānti's theory of cognition with false mental images（**alīkākāravāda*）and the neither-one-nor-many argument”と題して，第 16 回 IABS 会議（法鼓仏教学院，June，2011）で発表した．

6）Cf. MAV D 113b5–6, P 130b4–5：brgyud pas rjes su dpag pa'i shes pa'i yul dang / de las byung ba'i mtshan nyid kyi 'brel pa yin no //

7）Cf. PV III 55–58；戸崎［1979：126–128］；PVin II 1cd；Katsura［1984：227f.］．

8）このプラマーナの第二規定については，Katsura［1984：223f.］，Kajiyama［1998：24, fn. 8］，Krasser［2001］を参照．

9）Cf. Taber［2005：93–97］．

10）Cf. PV I 40. 概念知の対象は他者の排除たる普遍相ではあり，独自相とは異なるが，船山［1989：23f］が論じるように，その普遍相は実在の直観を基盤として生じたもの

であり，独自相とも密接に関連するものである．また，Krasser［2001：192f.］が指摘したように，ダルマキールティによるプラマーナの第二規定は「未だ理解されていない独自相に関して」（anadhigate svalakṣaṇe）という限定を伴って理解される以上，知覚の後に生じる概念知はプラマーナとはされない．

11）ayogavyavaccheda を含むダルマキールティの三種の vyavaccheda 理論については梶山［1966］，稲見［1990］を参照．上記の議論との関連では，特に PV IV 37b$_2$–39；Tillemans［2000：63–66］を参照．

12）新規情報を提供するという点で推理知と他の概念知が区別されるという点については，Katsura［1984：228, 234 n. 68］が注記するように HBṬ 34.17–20 の議論が重要である．

〈使用テキストと略号〉

PV I ＝ R. Gnoli（ed.），*The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti*. Roma 1960；PV III ＝戸崎［1979/1985］；PV IV ＝ Tillemans［2000］；PVin I, II ＝ E. Steinkellner（ed.），*Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya Chapter 1 and 2*. Beijing- Vienna 2007；HBṬ ＝ S. Sanghavi & M. Sh. Jinavijayaji（eds.），*Hetubinduṭīkā of Bhaṭṭa Arcaṭa*. Baroda 1949.

〈参考文献〉

船山徹［1989］「ダルマキールティの「本質」論― bhāva と svabhāva ―」，『南都仏教』63：1–43；稲見正浩［1989］「ダルマキールティにおける仏道」，『日本仏教学会年報』54：59–72；［1990］「vyavaccheda 再考」，『印仏研』39/1：410–407；Y. Kajiyama（梶山雄一）［1966］「仏教哲学における命題解釈― eva の文意制限機能―」，『金倉博士古稀記念印度学仏教学論集』，423–438；［1998］*An Introduction to Buddhist Philosophy*, Vienna；Sh. Katsura［1984］"Dharmakīrti's Theory of Truth." *JIP* 12：215–235；H. Krasser［2001］"On Dharmakīrti's Understanding of pramāṇabhūta and His Definition of pramāṇa." *WZKS* 45：173–199；J. Taber［2005］*A Hindu Critique of Buddhist Epistemology*. London–New York；T. J. F. Tillemans［2000］*Dharmakīrti's Pramāṇavārttika*. Vienna；戸崎宏正［1979/85］『仏教認識論の研究』，東京；若原雄昭［1988］「潜在印象（vāsanā）と知覚（pratyakṣa）―知識の真偽に関する唯識派の見解」，『仏教学研究』44：81–98.

〈キーワード〉　ラトナーカラシャーンティ，プラマーナ，自己認識，推理

（信州大学准教授，Dr. Phil.）